

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 21 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24593293

研究課題名(和文) 生体肝移植のレシピエント、ドナー、家族の抱える問題と術後支援の検討

研究課題名(英文) Problems faced by recipients, donors, and their families following living donor liver transplantation and support they require

研究代表者

師岡 友紀 (Morooka, Yuki)

大阪大学・医学(系)研究科(研究院)・講師

研究者番号：40379269

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、生体肝移植ドナー・レシピエント・家族の抱える問題および必要とされる支援を明らかにすることを目的として実施した。調査の結果から、生体肝移植ドナーは移植医療への「感謝」と「限界の実感」という相反する思いを抱いており、レシピエントの状況によりその思いは影響を受けることが明らかになった。また、レシピエントはドナーや家族に対する「気がかり」を抱いていることが明らかになった。さらに、レシピエント移植コーディネーターを対象とした調査結果を今後発表予定である。これらの結果から、生体肝移植を必要とする家族は互いの状況により課題が生じるため、それぞれに対する思いをふまえ支援を行っていく必要がある。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to evaluate the problems faced by donors, recipients, and their families following living donor liver transplantation and to examine the support they require. The results revealed that the living donors experienced “thankfulness” and “a sense of limitation” toward the transplantation surgery; these experiences appeared to be influenced by the recipients’ situation. In addition, it was revealed that the recipients experienced “anxiety” for their donors and families. Furthermore, we interviewed transplant coordinators regarding family problems. From these results, the donors’ and recipients’ families should receive support based on the family members’ feelings toward each other, because their problems could be influenced by the situations of others.

研究分野：移植看護

キーワード：生体肝移植 生体ドナー レシピエント QOL 移植医療 周手術期看護

1. 研究開始当初の背景

(1) 生体肝移植レシピエントの術後の負担

生体肝移植の10年生存率は70~80%程度で、脳死肝移植とほぼ同等の良好な成績が得られている。近年、移植後20年以上となるレシピエント生存例や、妊娠出産例なども報告され、長期QOLの向上をめざす時期にある。しかし、術後のレシピエントの生活には様々な課題がある。

第一に、免疫抑制剤による易感染性の問題がある。レシピエントは術後急性期だけではなく退院後も、免疫抑制剤の確実な服用による適正な血中濃度の維持と感染予防が必須となり、長期にわたり拒絶反応への不安を抱えていかなければならない。第二に再発と不安に関する問題がある。例えばHBC・HCVなどによる肝不全から移植に至った場合、再発予防のための治療に身体的苦痛を伴い、経済的な負担も大きい。しかし、現段階でレシピエントの抱える課題について、ほとんど研究がなされておらず明らかではない。

(2) 生体肝移植ドナーの術後の負担

一方、生体肝移植ドナーの術後の生活にも課題が認められる。ドナーは術後数年にわたり消化器症状やキズに関わる複数の症状を抱えているとの報告がある(日本肝移植研究会; 2005)。また、将来の自身の健康への不安やレシピエントが死亡した場合など精神的負担への配慮も指摘されている。こうした問題に関連して、ドナーのQOLの実態が著者らの研究で明らかにされ(師岡; 2011)、ドナーの抱える課題は明確になりつつある。

(3) 生体肝移植特有の家族内の問題と支援の必要性: 研究の意義

生体移植は近親者間で行われるため、移植手術をきっかけに家族内に潜在する問題が顕在化しやすいと考えられる。また、術後のレシピエントの状況によりドナーも家族も動揺しやすいと推察される。さらにドナーがレシピエントの家族であり介護者である場合も多く負担への考慮も必要である。そのため、それぞれの抱える問題がいずれかで完結されるものと考えのではなく、家族内の関係性を把握し家族全体への支援を行っていく必要がある。

通常、移植施設のレシピエント移植コーディネーターが、こうした支援を行っているが、依然としてコーディネーターが存在しない施設もあるほか、術後長期を経ることで診療体制が変化するため一貫した支援が困難な場合もある。

レシピエント、ドナー、そして家族に対する支援が「生体移植における看護」として明確になることで、効率的な術後支援が可能となると考えられる。

しかし、現段階では、ドナーとレシピエントの互いの立場や関係性に伴う問題や、生体移植における家族としての困難は明らかでない。まずは、問題の実際とその要因を把握する必要があると考えられる。

2. 研究の目的

本研究は、生体肝移植のレシピエント、ドナー、家族、それぞれの立場における生体肝移植や医療的支援に対する思いを把握し、互いの立場や関係性による問題を捉え、近親者で行われる生体移植特有のニーズをとらえることを目的として実施した。

3. 研究の方法

(1) 研究1: ドナーの思いについて

対象: 生体肝移植ドナー

方法: 郵送による自記式質問紙法にて生体肝移植ドナーに「移植手術に関する気持ちや考え、思い」を自由に記述してもらい、内容分析を行った。

(2) 研究2: レシピエントの思いについて

対象: 生体肝移植レシピエントの思いや考え、気持ちを記述した国内文献

方法: 得られた文献より、生体肝移植レシピエントの心理的な描写を抽出し、類似性に従って分類した。

(3) 研究3: レシピエント移植コーディネーターが考える家族の問題について

対象: レシピエント移植コーディネーター

方法: 半構成的面接により、生体肝移植を必要とする家族が抱える問題と必要とされる支援について調査し、質的記述の方法により分類を行った。

4. 研究成果

本研究は、生体肝移植ドナー、レシピエント、家族の抱える問題について、関係性に着目し、問題の要因を明らかにするとともに、必要な医療的支援を検討することを目的として調査を行った。

(1) 生体肝移植ドナーの思いについて

240名の記述が得られた。男性112名、女性126名、平均年齢は44.4歳であった。

ドナーの移植手術に対する自由記述を分析した結果を表1に示した。ドナーは【生体肝移植の恩恵を受けられたことへの感謝】を記す一方で、【直面する生体肝移植の限界】を記すものが多く、いずれも過半数を超えていた。また、【ドナーの抱えるストレス】として、術後の心身の多面的な負担と、術前に思いを馳せる【危機的な術前】が記された。対象の背景により記述数に差異が認められるか群分けして比較したところ、小児への移植のドナーは成人間移植ドナーより、【生体肝移植の恩恵を受けられたことへの感謝】を有意に多く記していた($p < 0.05$)。また、レシピエントの予後(生存・死亡)で群分けし比較したところ、レシピエントが死亡しているドナーは【生体肝移植の恩恵を受けられたことへの感謝】を記述する割合が有意に低く($p < 0.001$)、【直面する生体肝移植の限界】について有意に多い割合で記述していた($p < 0.001$)。

これらの結果から、生体肝移植ドナーは、

レシピエントの回復に大きな喜びと感謝を感じる一方、様々な生体肝移植の課題を実感すること、また、レシピエントとの関係性やレシピエントの体調により、その思いは影響を受けることが明らかになった。

本研究は、海外文献に論文発表し受理されているが、これまでドナーの率直な思いを記述するとともに、背景による差異を明らかにした研究は認められず、生体移植に対する限界といった否定的な思いについて明らかにした研究はないため、国際的にインパクトのある発表となった。

表1 ドナーの思い

カテゴリー-サブカテゴリー	度数	割合
生体肝移植の恩恵を受けたことへの感謝	143	59.6
レシピエントの回復を目にする喜び	86	35.8
医療者や家族への感謝	50	20.8
自分がドナーになれたという達成感	41	17.1
命の重みを実感	25	10.4
ドナー自身も健康状態が良いことへの肯定感	24	10.0
移植手術ができた充実感	18	7.5
直面する生体肝移植の限界	125	52.1
移植の結果における限界	40	16.7
生体肝移植の困難に関する気づき	39	16.3
移植が特殊な医療であることを実感	33	13.8
社会の無理解	27	11.3
経済的な負担	19	7.9
ドナーのストレス	105	43.8
苦痛	53	22.1
多面的な肝提供の負担	44	18.3
ドナーのケア不足	35	14.6
ドナーに対するケア不足	31	12.9
家族の無理解	7	2.9
レシピエントに対する否定的な思い	6	2.5
危機的な術前	75	31.3
術前の不安	39	16.3
必死の思い	35	14.6
恐れを感じない状況	14	5.8
術限のケア不足	10	4.2
避けられない選択肢	9	3.8

(2) 生体肝移植レシピエントの思いについて

8件の文献が抽出された。そのうち質的研究が5件、量的研究が3件であった

レシピエントの抱く思いを表2に示した。レシピエントは【免疫抑制剤に関するためらい】【ドナーに対する気がかり】【術後の身体経過に対する心配】【移植の選択に対する葛藤】【家族に対する気がかり】【医療機関に対するはがゆさ】【社会的な悩み】を抱えていることが明らかになった。ドナーや家族に対

しては、《ドナーに対する負債感》や《家族に負担をかけたことへの罪悪感》といった負い目を感じている様子が抽出される一方で、《ドナーに対する安心感》や《自己の回復意欲の高まり》、《家族の支えに対する感謝》といった肯定的な思いも認められた。レシピエントもドナーや家族全体に対して様々な気がかりを抱えているが、決して否定的な感情だけではなく、励みにもなっていることが示唆された。

これまでレシピエントの心情に関する研究は事例研究が主で、苦悩や葛藤といった否定的な意味合いを持つ感情のみに焦点が当てられていた。本研究により肯定的な思いを抽出することができ、医療者の関わりとして、そうした肯定的な感情を引き出せるような支援も必要と考えられた。

表2 レシピエントの思い

カテゴリー	サブカテゴリー
免疫抑制剤に関するためらい	制限された生活への気詰まり 免疫抑制剤の生涯服用による脆弱感 免疫抑制剤の副作用による落胆
ドナーに対する気がかり	自己の回復意欲の高まり ドナーに対する負債感 ドナーの心情に対する戸惑い ドナーに対する安心感
術後の身体経過に対する心配	拒絶反応への恐れ 原疾患の再発 術後の体調の不安定感 活動の抑制
移植の選択に対する葛藤	成果に対する疑念 延命から生じる負債感 意思決定の揺らぎ やすらぎの獲得
家族に対する気がかり	家族の負担をかけたことへの罪悪感 家族間の亀裂 家族内の役割変化 家族に対する義務感 家族の支えに対する感謝
医療機関に対するはがゆさ	情報に対する思い 医療者の経験を重んじる不信感 気軽に質問できない戸惑い
社会的な悩み	経済的な気がかり 職場への申し訳なさ 社会復帰後の体調管理への葛藤

(3) レシピエント移植コーディネーターの考える生体肝移植を必要とする家族の抱える問題について

これまでの検討結果から、レシピエント移植コーディネーターは、移植手術の前、レシピエントとドナーの意思決定に際して、術後にわだかまりが残らないよう支援している

ことが明らかになっている。すなわち、ドナーやレシピエントが術後に抱える関係性の問題は、術前の効果的な関わりにより解決することが可能であることが示唆されている。どのような事例において術後に問題が生じているのか焦点化するなど、事例で検討していく必要性が示唆されている。今後も引き続き調査と分析を進め、客観的に捉えた生体肝移植を必要とする家族の抱える課題と支援について、さらに具体的に明らかにしていく必要がある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 1件)

1. Morooka Y, Umeshita K. Perceptions of transplant surgery among living liver donors in Japan. *Progress in Transplantation*, 24(4), 381-386, 2014.
DOI:10.7182/pit2014400 (査読有).

[学会発表](計 3件)

1. MOROOKA Y, UMESHITA K. Thoughts on transplantation surgery by living liver donors. The 13th Congress of the Asian Society of transplantation. 2013/9/5. Kyoto International Conference Center (Kyoto-city).

2. 師岡友紀, 梅下浩司. 生体肝移植ドナーの移植手術に対する思い. 第49回日本移植学会総会. 2013年9月6日. 国立京都国際会館(京都市).

3. 師岡友紀, 梅下浩司. 生体肝移植ドナーの移植手術に対する思い. 第31回日本肝移植研究会. 2013年7月5日. 熊本全日空ホテルニュースカイ(熊本市).

6. 研究組織

(1)研究代表者

師岡 友紀 (MOROOKA Yuki)

大阪大学・医学系研究科・講師

研究者番号：40379269

(2)研究分担者

梅下 浩司 (Umeshita Koji)

大阪大学・医学系研究科・教授

研究者番号：60252649